

(2) 保養・療養地への脱皮

①新しいイメージづくり

保養・療養地への脱皮を図るには、それにふさわしいイメージづくりが必要となる。イメージづくりで重要なのは環境のイメージである。石和温泉は甲府市に隣接し、東京からも近い位置にある。周辺は既に甲府市の市街地のスプロールに巻き込まれてきているが、中途半端な都市の温泉になってしまっただけでは台無しである。

機能面では都市的な面を持ち、環境面では笛吹市の持つ田園や自然の要素を取り込んだ、季節感豊かな保養地、あるいは、庭園保養都市や公園保養都市というあたりに目標を定めて、地域の魅力とイメージづくりを進めていくことが望ましい。

②まちの環境・雰囲気づくり

温泉のまちの環境・雰囲気づくりには、まず、温泉を感じさせる風景が必要である。旅館等の施設があるだけで温泉の存在が外部から感じられなければ、魅力は減じられてしまう。泉源が見られたり、足湯のようなオープンな施設など直接湯が見られるもののほか、湯けむりによって温泉を感じさせたり、温泉の熱を利用したものや、湯が流れる音などで、温泉が豊かなところというイメージを演出する。あるいは、浴衣をきたお客さんが歩いている、というような温泉を連想させる風景による演出も効果を高める。

また、保養・療養地としては、落ち着いたまちの雰囲気や、安心感のある環境づくりが大切である。

③温泉が生きるメニューづくり

温泉の楽しみは単に湯につかるだけではない。風呂場の雰囲気はもちろんのこと、浴衣や館内で履くスリッパや外出の時に履く下駄など、身につけるもの、肌にふれるものは、品質が重要である。また、浴衣と、出歩く時に小物をいれて持ち歩く袋等はファッション性も重要である。このような“モノのサービス”は温泉を楽しませる重要なメニューの一つである。浴衣を着て記念写真を撮れる場所

があることも望まれる。

温泉に入る前後にどのようなことをするか（できるか）という点も重要なメニューの一つである。散歩が楽しめる環境であれば、町中をちょっと散歩してから入ることができ、特にすることがなく時間をもてあまして入るのとでは印象がだいぶ異なる。あるいは、果物等ちょっとお腹にいれるようなものがあることも効果を生む。

滞在を楽しむ中の温泉という位置づけから、温泉が生きる多彩なメニューづくりをしていく。

④滞在を支える多様な楽しみの提供

石和温泉郷にある各宿泊施設や観光施設がそれぞれに工夫をして、各施設内部での楽しみ方を提供するとともに、各施設が、他の施設の客に対しても、その楽しみのメニューをできる限りオープンにすることが望まれる。あるいは互いに協力しての取組みも望まれる。特に、温泉街へ出て楽しめるものを如何に増やすかがカギとなる。

保養・療養地としての温泉での滞在ということからすれば、非日常性だけではなく、「健康」というようなキーワードで日常生活につながるものを提供することも望まれる。例えば、有機生産の安心できる食材、健康効果の高い食材、健康食品やサプリメント、ハーブや入浴剤、その他自然素材からつくった各種商品等を販売する店舗、低カロリーでも飲食の満足感が得られる料理を提供する飲食施設など、健康志向に合致し、楽しめる場の整備が考えられる。これらの施設では、地元の人も日常的に利用し、あるいは店員として働き、情報交換等を通じた観光客と地元の人との交流・ふれあいの場としても活用する。

しかしながら、各宿泊施設や温泉街の内部だけで提供できる楽しみには限界があるので、滞在を支える多様な楽しみを提供するものは、外部にも広げて考える必要がある。例えば、石和温泉郷の近傍に、石和温泉が積極的に関わって何かの施設を整備したり、バスツアーのガイドとして石和温泉の人が乗り込んだりするののも一つの方法である。あるいは外部の人に温泉街の中に出店してもらったり、イベントに参加してもらったり、商品を提供してもらったりするなどして、多様な楽しみの提供手法を広げていく。

(3) 歴史と果実と温泉のまち、笛吹市

1) 歴史と石和温泉

①著名な資源（一般向け）と興味深い資源（歴史愛好家向け）

歴史資源は、歴史的な価値や希少性だけで観光対象としての価値を有するのではなく、歴史上の意味が一般の人によく知られたものかどうか、資源そのものが視覚的に興味を持ってみられる対象化どうかで観光的な価値は変わってくる。そのような一般的な評価とは別に、歴史により深く興味を持つことで顕在化する価値があり、それは歴史愛好家や一般の人よりもある程度歴史への関心が高い人達に対する価値である。この二つの視点から歴史資源を評価して活用を図っていく。

②観光スポットづくり

例えば、マンションに挟まれて立つ石碑と野中の一本の老樹の傍らに立つ石碑では観光的な魅力は異なる。もともと広い空間を持つ大きな社寺のような資源は別として、歴史資源にはその周囲の環境が大きな意味を持つ。活用する歴史資源では、周囲の環境を適切に設えて観光スポットに仕上げる。

③ガイドの導入、宿泊施設等でのセミナーなど

歴史資源には、説明を聞くことによって興味が高まるものが少なくない。もともと歴史に対する関心が高い人は説明板やパンフレット等の説明を読むことも多いが、一般の観光客には読まない人が少なくない。そのような人でも、ガイドの楽しい説明があれば、一時的にでも興味をもって楽しむことができる。歴史を含めた地域の説明を楽しめるように提供できるガイドの導入や、宿泊施設等での簡単なセミナーの開催など、人を介した歴史の楽しみ方を提供する。

2) 果実と石和温泉

①視対象としての果実

○田園風景

田園風景としての果実は、果樹園等の広がり眺めの活用である。花や実がついているときには直接の興味対象になるのはもちろんであるが、訪れた場所がどんなところであるか、つまり笛吹市がモモやブドウ等の産地であることを知らせるという意味を持つ。また、果樹園の向こうに見える山などの風景も一つの絵として成立する。

○花

モモ等の花が一斉に咲いている時期は優れた観光対象になりうるが、その見せ方によって魅力が変わるので、魅力が十分に発揮されるような見せ方を工夫するとともに、記念写真が撮りやすい場の整備を行う。また、実はよく知っているが花はよく知らない果実も少なからずあり、花そのものの魅力は弱くても、知ってもらうことで地域に対する関心が深まるので、時期によってはそのような花をタイミングを見計らって見せる工夫をする。

○実

モモ、ブドウ、カキなどの実がなっている様子は目を引くものであるが、実の熟し具合とともに見る距離によって感じ方が異なる。「食べていこう、買って帰ろう」と思わせることなど、ねらいに応じた見せ方を工夫する。

また、果樹の種類によっては、紅葉がきれいなものもあるので、きれいに見られるタイミングを捉えて案内するように努める。

○新たな場所での果樹等の植栽

町中のスポットや旅館の庭等の一画、観光資源の周囲などに果樹を植栽して修景や季節を感じさせる素材として活用する。それにより果実のまちであることの印象を深めていく。

②体験利用の対象

観光果樹園、観光農園として主に収穫と味覚を楽しむことや、特定の木のオーナーになることはよく行われているが、より幅広い活用を図っていく。例えば、

摘花（摘んだ花を持ち帰れる）、果実を使った料理や菓子づくり等の体験、果樹の記念植樹など様々なアイデアを出して試行する。

③素材としての果実

実をそのまま食するだけでなく、料理やスイーツ類の素材として新しいメニューの開発と食べられる場所の整備を行い、食材としての活用を広げ、果実のまちの印象を強化する。同様に、果実そのものを土産品・特産品として提供するだけでなく、味の良い加工食品（菓子その他）の開発、販売に取り組む。その際、パッケージについてもふさわしいものを工夫する。

その他、果実をテーマとしたグッズの開発や、木材部分を使った商品の開発等に取り組む。

④新たな種類の導入

果樹生産を主とした新たな種類の導入ではなく、風景のアクセントや話題づくりのために新たな種類の果樹をスポット的に植栽する。例えば、実をとることは考えずに花を見るためのモモ（花つきが多いもの、色が多少異なったり枝垂れなどの変種等）を植栽したり、地元の果樹と植物学的に同じ仲間属する他の果樹を植栽したりする。

3) 自然と石和温泉

①興味対象としての自然と付加価値としての自然

東京の都心やその周辺など自然が少ないところから訪れてくる者にとっては、自然の印象は重要である。自然は対象の特性によって、興味対象となったり、環境の良さを形成する付加価値として存在したりするが、それらをバランス良く配置して、地域の視覚的な環境の質のレベルを向上させる。

また、生態系や自然の仕組みなどの知的な興味対象としての自然、創作活動の場としての自然など、多様な活動の対象となるので、それぞれの場所の自然の特性に応じた活用を図っていく。

②眺望景観と身近な自然・身のまわりの自然

眺望景観の視対象を操作することは難しいが、視点（眺めている場所）のまわりを取り扱うことは容易である。視点のまわりをきれいにすると、そうしない場合に比べて眺望景観の見え方が大きく変わる。また、身のまわりの環境は地域の印象を大きく左右する。観光客が主に徒歩で利用するエリアやルートの周辺では、身近な自然・身のまわりの自然を適切に取り扱って地域の印象を高めていく。

③季節の魅力

観光行動は季節によって変わるので、当たり前のようにあるが、季節の魅力は観光にとって重要な要素の一つである。花や紅葉だけではなく、新緑や稔りも美しい風景を呈する。興味対象としてあるいは季節を感じさせる添景としてなど、効果的に見せる環境づくりに努める。

④護る自然と創り育てる自然

自然は、自然にあるがままにしておけば価値や魅力が高まるものだけではなく、人が積極的に手を加えて創り育てることによって価値や魅力が高まるものも少なくない。現状の自然を適切に評価し、護っていく自然は大切に保護して残し、そうでないものについては適切に手を加えて魅力を高めていく。